2018年度日本モンゴル共同ビチェース調査報告書

Report of the Japan-Mongol Cooperative *Bichees* Research Project in 2018

2018 онд Монгол-Японын хамтарсан "Бичээс" төслийн экспедицийн судалгааны тайлан

松田孝一・村岡倫・松川節・中田裕子・藤原崇人・牛根靖裕

K. Matsuda, H. Muraoka, T. Matsukawa, Y. Nakata, T. Fujiwara, Y. Ushine

2018年9月14日アルボラク郡の釈迦院遺跡現場にて

Printed in Aug/2019

2018年日本モンゴル共同ビチェース調査行動記録

9月7日（金）　日本→モンゴル

今年度のモンゴル調査への出発は、9月3日に来襲した台風21号のため関空が使用不能となり、松田孝一、村岡倫、中田裕子は名古屋、藤原崇人は岡山、松川節は福岡から、牛根靖裕は翌日の成田にと4班に分かれて出発。当日便利用者は全員インチョンで合流し、19:00 過ぎウランバートルへ向かい、20:50 ウランバートルのチンギスハーン空港に到着、荷物の受領に30分を要したが、23:20に宿舎のフラワーホテルに到着した。

9月8日（土）　展覧会の開催準備と地方巡検の準備

12:25、研究調査のカウンターパートのアヨーダイ・オチル教授（遊牧文明研究所）が来訪、2016年度の調査成果報告書を提出、展覧会開催と本年度の調査についての打ち合わせを行い、それらの費用のうち当面の出費分を支払い、仮領収書を受領した。調査終了時に再度精算することとした。展覧会は、「草原の文化・宗教交流と文字資料―モンゴル共同ビチェースプロジェクト 22 年の成果より」というタイトルで、オチル教授と我々日本側との 22 年間にわたる日本モンゴル共同ビチェース調査の成果を披露するもので、モンゴル国立博物館の特別展示室を借りて行うもの。

13:00、昼食時に明後日の展覧会開会式の打ち合わせ。14:30、ホテルへ帰還。地方巡検調査の準備。18:15、村岡、中田は空港へ入澤崇龍谷大学学長および同便搭乗の牛根を迎えに向かう。20:15、村岡、中田が入澤学長を宿舎のチンギスハーンホテルに送った後、牛根とともにホテルに帰還。

9月9日（日）　遊牧文明研究所訪問

11:30、入澤学長、村岡、中田、松田、松川、藤原、牛根はアカデミーのビルの7F の遊牧文明研究所のプレブジャブ所長を表敬訪問。歓迎を受け、研究状況などを説明（同氏は、その後、2019年2月に急逝された。思いもよらず、衝撃を受けている。同氏のこれまでのビチェースプロジェクトへのご支援に感謝するとともにご冥福をお祈りします）。付近のレストランにて会食、懇談後、入澤学長、村岡、中田、藤原、牛根、ガンダン寺の研究員 N. アムガラン師（大谷大学真宗総合研究所）は、市東郊60キロに位置するトニュクク遺跡、チンギスハーン像及び遊牧民家を見学。松田と松川はホテルに戻り、明日の開会式のスピーチの準備。夜、村岡ら帰還し、打ち合わせ後、就寝。

9月10日（月）　展覧会開会式、地方調査に出発→ボルガン県バインノール郡

8:50、ホテル玄関に集合し、国立博物館へ移動。

11:15、開会式を博物館ホールにて行い、入澤学長、プレブジャブ所長、チョイジャムツ・ガンダン寺管長、松田、オチル教授の順で挨拶、通訳はモンゴル国立大学のオヨンジャル

ガル氏。次いでテープカット。

11:50、展覧会開会。室内展示見学。また、ハルザンシレグ遺跡の所在するシャルガ郡を代表してこられた文化センター長の D. エンケバヤル氏へ、ハルザンシレグ遺跡で発掘され、ウランバートルで保存処理を行っていた仏像の足を、入澤学長から返還を行った。発掘を行ったエルデネボルド教授も立ち合った。

展示室内には22年前からのビチェース調査で採取した拓本や遺跡写真、仏像の足など成果物や出版した報告書が展示され、多くの写真が掲示されていた。村岡のハルザンシレグ遺跡を説明する松川撮影の現地でのビデオ映像が繰り返し大型スクリーンで放映されていた。

展覧会パンフレット

展示室入口

開会式テープカット

仏像の返還式

シャルガ郡ハルザンシレグ遺跡出土仏像足部分

展示室

折から博物館前の道路では大統領も出席してかつて粛清された人々の名誉回復のセレモニーが行われていた。

昼食後、14:00 に地方巡検に出発。一方、入澤学長はガンダン寺を訪問し、改めてチョイジャムツ管長と会見、翌 11 日に帰国した。巡検隊隊員は、われわれの他、アムガラン師も自身の車で同行。途中で食料品買い出し、給油を行う。15:25、出発。16:20、大雨。16:35、休憩。17:00、ルンでトーラ河の橋を渡る。川面に光がきらめき、雲間からも光が降り注いでいる。17:15、ダシンチレンへの途中のオボーで休憩。17:30、出発。

18:00、本日の目的地の石刻断片のあるボルガン県バインノール郡のゾヒンボラン（「出っ張った川の曲り手」という意味）という場所に到着する。碑石はオチル教授が前回来た時に、文字面が風化するのを防ぐために裏返しにしていたので、運転手たちに表に返してもらった。まだ太陽は沈んでおらず、「大唐」の文字が確認され、中田は、自身の研究している時代の碑文であることが判明して感激。たわしで碑石表面の土や埃を取り除くものの、碑石面の摩耗が激しく、また太陽の光線の角度もあり、それ以外の文字はほとんど確認できず、作業終了。明朝を期した。

21:30、野営テント設営、就寝。

9月11日（火）　碑文拓本採取

7:30、起床。碑石の付近に近所の牧民男女が来訪。8:00、朝食後、碑文の拓本採取に取り掛かった。「金微州」、「僕固」「乙突」などの文字が次々判明し、以前に近くで発見されている「僕固乙突墓誌」と関係ある碑石（「僕固乙突神道碑」）であることがわかった。拓本採取を終了後、昼食。

僕固乙突神道碑

13:30、出発。バインノールのショローンボンバガル壁画墓を目指すも、14:00、車がスタックを繰り返し、折からの大雨でトーラ河からの氾濫水が流れ込んで水びたしの草原で水路を渡る道がなくなり、14:15にこれ以上の前進は危険と判断、壁画墓へのアプローチを中止し。引き返して次の目的地ハラホリンへ向かうこととした。バインノールからダシンチレン、オギーノール経由のルートをとる。16:00、10分休憩。晴天で日差しは強いが、風が強く寒い。19:45、ハラホリンのイフホルムホテルに到着。

9月12日（水）　カラコルム博物館、エルデニゾー博物館と同寺院、ホショーツァイダム博物館見学→タイハル石

9:00、カラコルム博物館訪問。シネバト館長、デジットマー学芸員と懇談。エルデネゾー博物館にトムルバータル館長を表敬訪問、エルデネゾー（寺院）を見学。シネバト館長、デジットマー学芸員と昼食。オルホン河沿いに移動してホショーツァイダム博物館で突厥碑

文やフンチョロー（石人）などを見学、アルハンガイ県へと移動し、17:30、タイハルチョロー（石）にて石表面の文字を見学。次の目的地ムルン方面にむけ出発。
20:30、途中、ハヌイ村（バグ）付近で、ハヌイ河西岸沿いの道路から少し西に入った岩壁前で野営。夜中に星が美しかった。また冷え込んで厚着をしなければ眠れなかった。この時期は寝袋をもう一枚（大）を準備する必要を感じた。

9月13日（木）　ムルンへ向かう

10:00、野営した岩壁前を出発。ハヌイ河を東へと渡り、付近の岩壁のモンゴル文字とチベット文字の岩壁銘文を調査。11:00、エルデネマンダル郡で2号車の電気系統を修理。同所の食堂で昼食。13:30、出発。16:30、セレンゲ河を手動操作式浮橋（動力は流水）で渡河。19:30、ムルンのビシュレルトホテルに到着。20:00、夕食。就寝。

9月14日（金）　デルゲルムレンの釈迦院遺跡見学後、ムルンへ戻る

9:10、出発。食糧調達後、デルゲルムレン河北岸に位置する釈迦院遺跡に向け出発。デルゲルムレン河沿いに西へ向かい、何度も河畔に接近しすぎて道を失い、アルボラク郡にある遺跡にたどりつくのに苦労した東にアルタンガダスの大岩があり、太陽が照り返してまぶしい。遺跡はムルンから40 km。遺跡現場で三々五々表面調査を行う。寒さが厳しかった。

釈迦院遺跡

17:30、ビシュレルトホテルに帰還。19:00、夕食、就寝。

9月15日（土） オリヤスタイへ向かう

8:00、出発、給油をして、10:00、休憩、10:50、道を間違えていたことに気づく。サンギンダライ湖を北に見て西へ進むコースをとる。11:30、休憩。天気よく、付近は雪が見え、氷が張る。舗装道に入り、15:00、イフオール郡を通過。16:12、トソンツェンヘル郡を通過。17:05、テルメン郡を通過。17:39、舗装道路が途切れ、オリヤスタイまで未舗装道を走る。19:30、オリヤスタイのホテル、ザブハンに到着。20:00、市内のカフェで夕食。就寝。

9月16日（日） ハルザンシレグ遺跡到着、エルデネボルド教授の説明（1）

6:00、起床。気温4℃。8:30、出発、給油後、市内を移動中の多数のヤクに遭遇。9:05、オトゴンテングリ山を望む峠のオボーで運転手が旅の安全を祈願して、米を散じた。10:15、11:50、休憩。12:25、タイシル郡の橋でザブハン河を渡る。雪を頂くハサクトハイルハン山が望見される。13:04、バヤンホンゴルとゴビアルタイを結ぶ舗装道路に入り、13:30、アルタイ市にて昼食。15:00、アルタイ市発、16:55、シャルガ河を渡る。17:10、ハルザンシレグ遺跡に到着。遺跡へ入る道が変更されていた。発掘責任者のエルデネボルド教授（モンゴル科学技術大学）と挨拶。直ちに荷下ろししてテント設営。同教授から発掘状況の説明を受けた。

今日は発掘6日目で、昨年はマウンドの西南部を掘ったが、今年は東北部分12m四方を範囲とし、そこを東西に3分して発掘している。時代を異にする層があり、時代差を慎重

に見極めようと考えて発掘をすすめている。現在は想定される三層の上層部分 20-~25cm を発掘中である。

昨年度と比べて特徴として、屋根瓦、比較的新しい家畜の骨が上の層から出たが、昨年はもっと下から出た。仏像の指（親指と人差し指）が出土しているが形態は昨年のものと異なる。指に朱色の染料が付着している。焼けた木が出た。指のそばの木をサンプルとして分析に出すことを考えている。羊骨や牛の肩胛骨（30 ㎝×13 ㎝）の占いに用いたものが発掘されている。（9 月 17 日、松川からオイラトに広がっていた肩胛骨占いとの関係を考慮すべきかとの意見が出た。）モンゴル時代の土器片が出土しているが、同教授によるとハルホリン出土の土器片と酷似している。

オチル教授からハルザンシレグ遺跡の発掘の全容をまとめた報告書を 2019 年 3 月に整えて提出して出版されることとなっているとの話があった。夕食後、テント泊。

ハルザンシレグ遺跡出土物

9 月 17 日（月）　ハルザンシレグ遺跡見学、エルデネボルド教授の説明（2）

8:00、朝食。アムガラン師やエルデネボルド教授の話を聞く。アムガラン師は現在ガンダン寺の学術文化研究所の課長をしており、研究員は 6 名、兼任者は十数名いる。ガンダン寺付属仏学院内の授業も担当している。生徒は 300 人。2008 年に研究部門が設立され、一般の学生もいる。2010 年から女性ラマ（全国に尼寺が 2 寺）も入学している。ガンダン寺には 8,600 件の経典がある。（全国に？）100 万件の経典があったが、そのほとんどがチベット語のものだった。〇年に袋入りの仏具と経典が集められ、貴重なものもあった。仏具は売られ、経典はガンダン寺に入れられた。1960 年~70 年代に個人蔵のものがガンダン寺へ

入れられた。1937~38 年に宗教活動が停止され、1946 年に再開された。現在、学生はモンゴル人以外に、内モンゴル、ブリヤート、韓国から来ているとのことであった。

エルデネボルド教授から、絵が出土しており、裏に 194〇年にソ連に馬を送ったと書いてあった。

10:00、遺跡現場に向かう。エルデネボルド教授の現説。今年の発掘場所は、深さ 5 ㎝で日干し煉瓦が出土、ごく新しい清朝時代のものと思われる。13 世紀の層はその下にあると思われる。すでに発掘された層のところどころに陶器片、骨片がある。A,B 二区画に分けると区画ごとに出土物の様相が異なる。A は指破片が出るなど宗教的、B は生活品が中心（цог）。なお、B は 2014 年のトレンチの底部と類似というか、その続きの発掘とおもわれる。

11:00、発掘場所を撤収し、ベースキャンプに戻る。松川とオチル教授は郡長トンガラクタミル氏に会いに出かけるも留守のため会うことができず、12:50、キャンプに戻った。

15:00、郡の博物館のハンドマー館長、館員のガンゾリク氏、文化センターのソガル氏（音楽教員が本務）、ボルドバータル氏など文化財関係者 7，8 人が来訪。郡長はやはり外出中で来られず。しばし歓談し、ハルザンシレグ遺跡発掘により成果がでたことをよろこばれており、今後この遺跡などの歴史文物を地元の村おこしに生かせたらという趣旨の話があった。感謝の意を述べて、記念撮影の後、再会を期待して散会した。郡長から 17:30 に連絡があり、ダルビに居るとのことで会うことができないことがわかった。

その後、ゲル内で村岡、中田はボルガン県で採取した拓本を広げて解読作業を進めていた。中田はその際、「延陀」、「儀鳳三年」（678 年）の表記を見出した。ますます突厥第一可汗国と第二可汗国の間の時期の歴史記録の空白を埋める重要な資料であることが明らかになった。21:30、モンゴル教育文化科学スポーツ省文化芸術政策局の技官（有形文化遺産担当）の B. ダワーツェレン氏が立ち寄り、しばし面談。遺跡の発掘状況を説明する。遺跡にて野営。

ハルザンシレグ遺跡の全景

発掘現場での集合写真（牛根撮影）

9月18日（火）　バヤンホンゴルへ向かう

朝食後、遺跡で発掘隊と巡検隊合同で写真撮影を行った。

9:20、出発。シャルガの発掘現場から舗装道路まで（途中遠回りをしたようだったが、順調に）70分ほどで到着。13:50、ボーツァガーン郡で昼食、町は美しい雰囲気のところ。16:40、バイダリグ河を橋で渡る。ここからバヤンホンゴル市まで舗装道路が整備されていた。19:45、バヤンホンゴル市のソウルホテルに到着。同所泊。

9月19日（水）　ウランバートルへ向かう

9:30、雨の中、出発。市内は舗装工事中で迂回してガソリンスタンドへ到着して給油。

11:35、郡から78kmの地点、道路脇の岩にたくさんのキリル文字が書かれている。古い墨書があるかも知れないが、停止する時間なく進む。（この岩壁は、2018年8月12日に松川が調査済で、キリル文字による落書き以外は認められなかった。）12:24、アルバイヘールで昼食。レストランの近辺は雪模様。14:03、市内のアルバイヘール寺院（ガンダンプンツォクリン寺院）に参詣。ちょうど、「壺祈願」という宗教行事が行われていた。これは、旧暦の秋の月（7～9月）の吉日におこなわれるもので、信者は25種類の供物（五穀・五宝・五薬・五味・五香）で壺（bumba）を満たして寺院に奉納し、商売繁盛・無病息災を祈願する。15:10、オンギ河の橋を渡る。しばらく進むと雪が視界を遮るほどになった。

15:55、休憩。18:30、ルンのトーラ河の橋で休憩。ずっとみぞれが続く。ウランバートル市内に入り車がパンク、修理で時間をロス。21:40、ようやくフラワーホテルへ帰還。22:20、ホテルの食堂はすでに閉店していたので、付近の石庭で遅い夕食をとる。24:00、村岡氏の部屋で明朝4時出発（プサン経由セントレア行便）のため眠らず待機する藤原氏と25:30まで話をして就寝。

9月20日（木）　巡検装備、記録の整理

9:00、朝食。午前中は旅行装備、記録などの整理。12:30、昼食。雪が激しく、寒さも厳しい。

9月21日（金）及び22日　国際会議出席

国立図書館で開催された、「世界遺産大ボルハン・ハルドゥーン山とその周辺の聖なる景観：研究、保存及び保護」の国際会議に出席。同所にてオチル教授と調査費用の精算を行う。

9月23日（日）　帰国

4:00、起床、5:00、出発、7:30搭乗、離陸してソウル経由で帰国。